

これってどうなの？

オオカミが来たぞ！

～突然襲ってくる資源の途絶に備えを～

オオカミが来たぞ！ーホルムズ海峡封鎖ー

1979年のイランのイスラム革命以来、エネルギー関係者が警告を繰り返してきたホルムズ海峡の封鎖。しかし、半世紀近くたっても発生しない危機は、いつしかイソップの「オオカミ少年」の嘘のように受け止められるようになっていた。

しかし、イソップのお話と同様、突然、本物のオオカミは現れた。ホルムズ海峡の内側、ペルシャ湾岸にはサウジ、イラン、イラクなど、大産油国が並び、石油の供給量は、世界の2割、日本の輸入の95%を占める。現れたオオカミは、飛び切り獰猛なのだ。

羊(石油)の守りは堅固であった

オオカミの出現で、世界は大騒ぎだ。日本でも「ナフサが足りない」などの声も聞かれる。それでもトイレットペーパーの買い占めが起こり、石油価格が3～4倍に跳ね上がった1970年代のような混乱は起きていない。2度の石油危機以降、他の先進国と歩調を合わせて石油備蓄制度を整備し、電力を中心にエネルギーの脱石油を進めてくれた先人たちに感謝である。ホルムズ海峡封鎖当初の石油の備蓄量は約240日分。原油の代替輸入も6月は約8割まで回復し、国内の石油供給は来年春までは確保できる見通しである。羊は意外と堅固に守られていたのである。

実は無防備だったもう一頭の羊(LNG)

ところが、思いもよらないところに無防備な羊が一頭いた。LNGである。潤沢な備蓄を保有する石油に対し、日本の発電量の3分の1を担うLNG火力には、3週間程度の在庫しかないのだ。

LNGもまた、カタールなどホルムズ海峡経由の供給が世界の2割を担う。幸運なことに、現在の日本の調達比率は6%程度であったため、石炭火力の焼き増し等により、電力の供給に支障は出ていない。しかし、今後は低炭素電源のLNG火力の開発が多数予定されるなか、

圧倒的な増産余力を持つカタールへの依存は高まる可能性が高い。政府はようやくLNG在庫の拡充を模索し始めたが、このマイナス162℃の液体燃料は、貯蔵タンクが高価なうえ、長期保存には向かない。この羊は、増え過ぎると守るのが大変なのだ。



オオカミに負けない羊(原子力)

海外の資源に頼らない電源としては、再エネがある。ところが、風の吹かない日、曇りの日が続けば、予定外に火力燃料を買い増ししなければならず、却ってピンチを招くこともあり得るのだ。

こうしたなかで、改めて注目されるのは、いったん燃料を装荷すれば4年程度使えるという原子力発電の価値である。原子力は燃料供給途絶というオオカミに負けない羊なのだ。

昨年決定された「第7次エネルギー基本計画」において、原子力は、発電所新設も含めて「最大限活用」とされた。オオカミの出現を機に、将来にわたる利用についての議論が活性化することを期待したい。



ヒロ・ミズカミ 代表
水上 裕康 氏

電力取引・発電用燃料取引のコンサルタント、クライアントの外資系投資銀行とともに、市場リスク管理を中心とした電力・燃料取引を電力会社に紹介、そのかわり、電力を中心としたエネルギー関係情報の発信を続けている。エネルギーフォーラム誌等に寄稿。

一橋大学商学部卒、米国ジョージタウン大学MBA(経営学修士) 電力会社で通算16年間燃料業務を担当 2020年(株)ヒロ・ミズカミ設立

